

1. 浅野 幸男氏（株式会社デンソー九州 代表取締役社長）

「市域外も経済圏と捉え、人口増を目指してほしい。」



浅野 幸男（あさの ゆきお）

1983 年自動車システム部品の総合メーカー(株)デンソー入社。2 度の米国赴任を経て、2019 年から西日本の生産供給を担う(株)デンソー九州を担当。北九州の若い仲間と、九州のモノづくり地位向上に挑戦。北九州が好きになり移住を決意。23 年末退任後も、家内と当地での生活をエンジョイ予定。

「過去に囚われず前向きに」

過去に囚われず、将来を見据えて考えていけば良いのではないのでしょうか。北九州市が持つ経営資源を使うことで日本のリーディングシティになることができると考えます。企業経営をしていると到達目標や、「何をやるか」といったことが重要視されます。行政では、人口を増やすことだと思いますが、そのために人口増に結び付く資産について一貫性を持ちつつ、底上げしていくことが必要でしょう。ポテンシャルはたくさんありますが、それらが人口を増やすことに対して有効なのかどうかを考えてみてはいかがでしょうか。

「歩いて行ける範囲に

食事・買い物・医療の全部がある」

もともと名古屋での生活が長く、アメリカ駐在を経て北九州市に来て5年経ちますが、気に入っています。

北九州市では歩いて行ける範囲に食事・買い物・医療の全てがあります。今までの赴任地では何らかの交通手段に頼らなくてははいけませんでした。住んでみると実感を得られますが、住んでみないと分からないことかと思えます。

上京の際は、北九州空港と福岡空港の半々の利用で、やはり軌道系アクセスの必要性を感じます。

「市域外も経済圏に含めて考えるべき」

稼ぐことは、企業の中では当たり前に行っていることなので、「稼げるまち」というフレーズは違和感なく感じます。但し、何で稼ぐかがポイントで、総花的で考えるよりは集中できる項目を考えた方が良いと思います。市域外も含めて経済圏と捉え、エコシステムを構築できるかどうか大切です。北部九州圏として、機能分担も必要ではないでしょうか。

また、人口増に向けては、職を創出しなければなりません。その際もやはり、市域外も経済圏と捉えるべきでしょう。職場は別の自治体でも、北九州市に住みたいという人もいます。その時に重要なのは、交通インフラです。特に北九州空港へのアクセスは重要です。

福岡市を目指す必要はなく、どう役割分担をしていくか、という視点を持つことが大切です。福岡市と簡単に行き来ができる、アクセスを便利にするという視点も必要です。週末買い物をする場所が福岡市でも、不動産価格が北九州市の方が安いということを生かして、住みたいという人を増やしていくのも一つの手だと思います。

「人口増の施策は効果の検証を」

観光面では、インバウンドに力を注いでも人口は増えないと考えています。アミューズメン

トでは人は増えません。観光地という意味では、北九州市は通過点ですが、少なくとも1泊だけはしてもらえようとするといったことも考えられるのではないのでしょうか。

子育て支援については、これまでやってきた実績が、人口増にどれほど役立っているのかを検証することも必要かと思えます。

「優秀な人材を惹きつけることが重要」

人材に関しては、優秀な人材をどのように惹きつけるかが重要です。地元には九州工業大学など理工系大学がありますが、採用は難しい状況です。最近では採用しても定着率が低いのですが、おそらくその理由は若者の中に将来に対する漠然とした不安があるからでしょう。“これから仕事が増えていく”というイメージを見せるためには工夫が必要です。製造現場は入社してから育成することが使命です。一方、技術者は技能をアップし、キャリアを伸ばし続ける必要があります。

「他にない強みをどうアピールするか」

他所にない強み、全国区で北九州市の優位性をアピールできるポイントがあることが若者には響きます。グリーンなど、新しい機軸を議論して、どうユニークさを出していくかが重要です。

また、北九州市でもグリーン成長戦略を進められていますが、これを企業立地に結び付けるようにしていかなければなりません。グリーンエネルギーを使えるとなれば、企業誘致にインパクトがあると思います。

GX は、関連企業がうまく集積してエコシステムをどのように構築するのが重要です。

「クリーンな製造業の イメージを浸透させていくべき」

北九州市のイメージとしてはやはり、ものづくりがベースになっています。そのイメージを、

クリーンで世の中の役に立つというものだ、というイメージに引き上げることが大事です。製造業の現場も昔と比べてずいぶん変わってきました。ソフトのウェイトが大きくなり、スマートになってきているのでその点がアピールできれば良いと考えます。

2. 朝比奈 一郎氏（青山社中株式会社 筆頭代表 CEO）

「北九州市はいろいろなポテンシャルをもった、『稼げるまち』。それを生かして、
いろいろな環境が整備された、安心安全に暮らせるまちに。」



朝比奈 一郎（あさひな いちろう）
埼玉県出身。北九州市アドバイザー。
東京大学法学部卒業。ハーバード大行政大学院修了（修士）。通商産業（経済産業省）入庁。「プロジェクト K（新しい霞ヶ関を創る若手の会）」初代代表。同省退職。2010年に青山社中株式会社を設立。政策支援・シンクタンク、コンサルティング業務、教育・リーダー育成を行う。NPO法人地域から国を変える会理事長、一般社団法人日本と世界をつなぐ会代表理事。

「環境問題を克服した実績を未来に。」

北九州市には公害を克服してきた歴史があります。アジア諸国や新興国など、今後成長していく国に対し、先輩として良いメッセージを出すことができると思います。環境の問題を最先端の技術やインフラ、市民の協力等、ハード面とソフト面を連携させ乗り越えてきた歴史は誇るべきものです世界に対して打ち出しているのではないのでしょうか。

アピールの仕方としては「自治体外交」と「ステイト・バイ・ステイトアプローチ」があると思います。かつて、経済産業省に在籍した際に、インドのタミルナドゥ州とやり取りをし、覚書を結んだことがありました。国と都市、という格にとらわれずに、フィリピンでもベトナムでも太平洋の島しょ国でも、個々の都市が主体で外交を行い PR すれば、ビジネスにつながる可能性などがあります。

例えば中国では二級都市などでも多くが外交部を持っていますし、北九州市にも外交部局があってもよいのではないのでしょうか。

「稼げるまちであるアピールを。」

国に余裕がなくなっている中、どの地域

も自立・自活して食べ・稼いでいかなければいけないと思います。「お金を稼ぐ」を前面に押し出すことに抵抗があるかもしれませんが、今の世情を冷静に俯瞰したとき、経済の重要性は益々高まっています。食べていける・稼げるまちであることを押し出していくべきです。

他市を凌駕する環境克服・インフラ整備の積み重ねがある北九州市は、インフラ輸出のポテンシャルが高いです。環境破壊の負の歴史が強くなりながら、それを克服したというイメージも合わせ、他市よりも稼ぐポテンシャルがあると考えています。

インフラ輸出の金額など、実際の事業における KPI を設定し、達成し続けていくことが大切です。また、外部への PR も重要ですが、やはり、市民に理解してもらうことが大事です。ゴミ処理・下水等、どの分野であっても、インフラをどのように輸出し、感謝され、地球温暖化にどれだけ寄与したのかというのを市内向けに PR していかななくてはなりません。

インフラ以外にも、地政学的なポテンシャルの高さがあります。アジアに近く、九州のゲートウェイでもあり、港も空港もあります。交通の要衝としても経済活性化が図れるのでない

でしょうか。

「新たな分野へ」

新しい機軸という意味では、国防・防衛などに絡めて産業を発展させていくことも考えられると思います。

政治的な問題がありますが、今後のアジアの安全保障環境が厳しくなることを考えると、潜水艦の製造等、防衛産業にもポテンシャルがあると思っています。現実問題世界情勢をみても、そういった視点も必要ではないでしょうか。北九州がまさに日本を守る、というような、様々な防衛産業が発達する都市になれば良いと思います。

北九州にはスペースワールドの過去などから宇宙のイメージがある他、先述のとおりアジアが近く、海・空港もあります。そういった意味でも防衛産業が発達するポテンシャルがあると思います。

「産学連携でスタートアップに注力を」

稼げるまちを目指していくためのアプローチとしては、スタートアップの集積も一つの切り口です。とはいえ日本からメガベンチャーはあまり育っていません。ただスタートアップが盛んな都市はあり、面白いこともやっています。そうした都市に負けないよう新機軸、すなわち産学連携に力を入れて、世界に羽ばたくメガベンチャー育成に努める必要があると思っています。

「『環境』のまちを目指して」

環境にも様々あります。住環境や自然環境、生活環境、企業にとっての環境、平和に暮らせるよう、戦争が起こらないための環境、子育て環境など、いろいろな「環境」が整備されて、未来に向けて安心安全に暮らせるようなまちになれば良いのではないのでしょうか。

3. 麻生 渡氏（一般財団法人九州オープンイノベーションセンター 最高顧問・元福岡県知事）

「北九州市が持つポテンシャルを生かして、力強く市民を牽引して行ってほしい」



「北九州空港は有利な環境にある」

福岡空港は 2,500 メートルの滑走路を作ろうとしていますが、それでも受入増は 20%程度です。もう少し増加する可能性もありますが、想定されるような航空需要が福岡空港に増加すれば 20 年ももたずにまたパンクするでしょう。その時は北九州市に分担してもらおうしかありません。

福岡市内の中でも、将来は佐賀空港（2,000 m）と連携すべきという人もいますが、高速鉄道（西九州新幹線）が空港を通らないルートにしてしまったことに加え、北九州空港は 3,000 メートル化で断然有利になります。

北九州空港の良いところは、空輸に加え、海上輸送も使えることです。実は、海上輸送を使えることは北九州空港の将来にとって、とても大きな力になると考えています。

北九州空港と福岡空港を繋ぐアクセスは、筑豊経由の高速鉄道を作るのが一番良いと思います。そうすると筑豊の活性化にもつながるのです。これは、私が知事の時に研究したことです。

「容積率の緩和は積極的に行うべき」

福岡市の天神ビックバンへ対応する形で、小

麻生 渡（あそう わたる）

北九州市出身。

京都大学法学部卒業後、通商産業省（経済産業省）入省。商務流通審議官や、特許庁長官、財団法人中小企業総合研究機構顧問を経て、1995 年 4 月より福岡県知事を 4 期、2005 年より全国知事会長を兼務（三期 6 年）務め、2011 年 4 月退任。福岡空港ビルディング株式会社 代表取締役社長、学校法人福岡工業大学 最高顧問、第一交通産業株式会社 顧問等を歴任。現在は一般財団法人九州オープンイノベーションセンター 最高顧問、新しい結婚応援運動 JUNOAL 最高顧問。

倉と黒崎で容積率を緩和すると聞いていますが、容積率を 600%から 800%に緩和する、というのは規模として小さいと感じます。

200%の緩和は、福岡市だと、大きな意味があるので変化が起きますが、小倉では大きな変化は起きないのではないのでしょうか。だから、もう少し大きな緩和をするべきでしょう。

小倉駅前も小倉城口に関しては容積率が低いし建物も古いです。一方の新幹線口も、大きな施設はたくさんありますが土地を活用できていません。そこを大胆な規制緩和して活性化させるべきでしょう。

「北九州市にとって半導体産業は重要」

熊本ばかり半導体で話題となっていますが、北九州市も半導体産業は十分あります。半導体関連の組立工場は確かにないかもしれませんが、それを支える部品工場や薬品工場はたくさんあります。だから、半導体は北九州市の非常に重要な産業の一つで、北九州市も半導体基地であると言えます。

半導体の組立工場は熊本等に進出することになりましたが、半導体産業は今後とも北九州市の基幹産業として発展させていくという意思表示をしないといけません。

北九州市が半導体産業を推進する方法としては、半導体産業をつなげて半導体ネットワークとし、この約 100 社で協議会等を作ると良いでしょう。北九州市に半導体産業が集積している事が外から見えて、企業も北九州市も「半導体をやっているのだ」という状態にすることが大切です。北九州市の半導体産業を内外に周知して、応援してあげるべきでしょう。

『企業発ベンチャー』に勝機がある

ベンチャーの今の作り方は 3 種類あります。1 つ目は企業発ベンチャー、2 つ目は大学発ベンチャー、3 つ目はスタートアップです。

私は企業発ベンチャーに着目しています。企業発ベンチャーは企業内で色々研究し、一部門などで温めておき、タイミングを見計らって事業性を見出すことができれば別会社を興すということをしています。

例えば安川電機はアイキューブを設立し、中小企業投資等も行っています。昔、富士電機から富士通ができたし、NTT から派生した NTT ドコモも良い例でしょう。

そのように、会社が分かれて結構大きくなるケースがあります。実は、今、北九州市の企業はどれも「このままじゃだめだ」と一生懸命です。何か新しいことをやらないといけなく考えて、随分模索し、企業内で研究したり、大学に足を運んだりしています。このように既に取り組んでいる事業を形にして、別会社を興す方が、遥かに成功の確率が高いと考えています。だから、企業発ベンチャーを北九州市は大きく力入れてやるのだということを明確に打ち出した方が良いでしょう。

「メタバースなど新たな技術の活用を」

北九州市は、人がやらないびっくりするようなことやった方が良いでしょう。メタバース、仮想空間を先行して北九州市でやってみたらどうでしょう。且過市場などのリアル空間に加

えて、仮想空間市場を北九州市で作って見せて、買い物を楽しめるようにする、或いは、アバターという人間が出ていろいろ活動する空間を作っても良いでしょう。

それから、ドローンはどうでしょう。これは、先行すれば、とても北九州市の生産性が上がると思います。ドローンの実験基地として、もう少し活発に受け入れていく可能性はあります。北九州はいろんな種類の工業もあれば住宅もあれば山もあれば川もあるので、そういう色々な条件の違うところがあるから、色々な実験ができるのではないのでしょうか。例えば公共建築物の老朽化対策のチームでも採用できるでしょう。

「掲げる旗（言葉）は力強く」

一番大事なことは、どういう旗を掲げるかです。「稼げるまち」でも、いずれにしても、北九州市のイメージを変えて、ものすごく元気が出るような言葉にしないとダメです。

リーダーの一番大事な条件は、「我々はどこに行くのだ。」ということ、みんなが「そうだ」、「それでいけるぞ」ということになるような旗を立てられるかどうかです。

この旗は、良い言葉、力強い言葉、みんなが「それだったら俺もやれるぞ」となるような言葉をいくつか並べて作らなければならないでしょう。

確かに色々課題はありますが、課題ばかり言われると、みんなしょぼんとなってしまいます。みんなを激励して前向きにしなければいけません。

例えば、合計特殊出生率が政令市の中でもトップクラスであることは、あまり知られていません。お年寄りの都市だと思われています。

それから、美味しいものも多いですね。そういう意味では、移住についてもとても有利であると言えるでしょう。

4. 天野 功一氏（天寿し、北九州市観光大使）

「美味しいものを食べながら、「食のまち・北九州」の“次”を考えてほしい。」



天野 功一（あまの こういち）

北九州市出身。北九州市観光大使。

調理専門学校を卒業後、東京の寿司店での勤務を経て「天寿し」に入店し、先代の父親のもと修行を積む。

2004年に「天寿し京町店」を開業。アワビ、ウニ、サワラなど地元食材のブランド化に貢献し、地元の食材を生かした北九州市ならではの「小倉前・九州前」と言われる寿司の価値を高めている。

「良い提言に対しては、スピード感を持って対応してくれる仕組みが市にあればよい」

市に提言する機会がしばしばあり、市には良い提言をワンストップで受け入れてくれるような仕組みと、スピード感をもって働いている方が、いきいきと働ける部署があれば良いと思います。

北九州市は、かつて修羅のまちとも言われていましたが、今では某雑誌のランキングで「50歳から住みたい地方」で日本一になり、「日本新三大夜景都市」でも日本一になりました。このように市が良いことで話題になったら、すぐに市として対応することが重要だと思います。

「北九州市では「見得」を切って、美味しいものを食べてほしい」

観光において、インバウンドでは、使う金額の桁が違います。例えば、夜景を見に行きたいという要望があったらバスを出す、というレベルではなく、ヘリコプターで見せられるようにするか、一流の料理が食べたいという要望があればリーガロイヤルホテルの一室でドレスコードのある食事会を開催するといった、世界の富裕層への対応ができるようにしていくことが必要ではないでしょうか。彼らのもつ交通手段に払う金額の感覚として、飛行機をタクシ

ーのように利用しています。例えば、昼を天寿しで食事をしてから東京に行き、また北九州市に戻ってくるというような動き方をします。そのような感覚に込められるようなパフォーマンスがインバウンド対策においては必要です。

食に関して、「おいしいもの作って」と言われたときに金額設定をしないというような傾向があるように思います。

北九州市に来たら「見得」を切って、美味しいものを食べてほしいと思っています。

「人生は一回きり。」

若者にはチャレンジをしてほしい。」

商売人は、それぞれの親方の考え方を大事にすることが重要と考えています。どのような路線の商売をしていきたいか、ということをよく考えることが大事です。お店としての値段を上げるということは、料理人としてのスキルが上がることにつながるものだと思います。若い人がチャレンジしたときに、風当たりが強くなるようなことがあれば、私とその風を受け止めます。料理に正解は無く、人生は一回きり。是非若い方々は高級店のスキルを学び、チャレンジして欲しいです。

安い値段でやっていきたいのであればそれも良いですが、B級グルメの店から急に高級店

に転換することは難しいです。どうせやるのであれば、高級を目指してみてもどうでしょうか。北九州市には富裕層も結構いるように感じます。ただ、高級店をやるとなった際には、高いだけではお客さんは来てくれません。職人が育っていくサイクルを市全体で作っていかないとつぶれてしまうので、そのような危機感を持つことも料理人として重要だと考えています。福岡市がバルセロナなら北九州市はサンセバスチャン。良い職人がたくさんいるまちだと思っています。

「北九州市の一年が均等ににぎわうように」

北九州には、8月は行事がたくさんあり、人が来ます。反対に秋は大きな行事がないです。「わっしょい百万夏まつり」を秋にしてみるなど、北九州市の一年が均等ににぎわうような工夫があれば良いと思います。空気が綺麗なのは秋から冬にかけてなのですが、その秋に何も無いというのは勿体ないのではないのでしょうか。

「美味しいものを食べて、まじめな話を」

食べること・美味しいものは有り難い。満腹になると人は饒舌になります。お酒を飲まずに美味しいものを食べると、まじめな意見が出ます。政治に関わる方が利用してくださることもありますが、貸し切り空間の中で、皆さん本音トークをしていただけているようです。

「生産者の想いを汲み取った商売を」

北九州市にはB級グルメが根付いています。高級路線に変えてもいいのではないかと考えています。例えば、5,000円の味にするためには2,000-3,000円の食材を使わないといけません。高単価の食材を使うことで、その生産者も潤っていきます。安い食材ばかりでは、丁寧な仕事をする人が減って行きます。生産者の想いを代弁できるのは料理人しかいません。当店で素潜り漁で採れた食材を使っています

が、彼らが命の危険を冒して獲った食材であることをお客さんにも説明しています。そこには、素潜りの人たちを守ってあげたいという想いがあります。

海外から来るお客様に対しても素材の説明をすることがありますが、話すとても喜んでくれます。説明は一通り英語で行いますが、海外の方も日本語を話したがっているのも、あまり流暢な英語にならないようにしています。例えば、フランスの農村部に行って流暢な日本語で話されたら幻滅するようなものです。そのような匙加減も大切だと考えています。

「四季折々の魅力を活かすこと、 「食の街」の“次”を考える」

「食の街」の“次”を考えていかなければなりません。

福岡市からも、世界からも来てみたくなるようなまちが良いです。食だけではなく、北九州市が良いところだから行ってみよう、という感じで来てもらえたら嬉しい。五市合併がネックになっているかもしれませんが、それぞれの土地の風物詩を四季ごとに生かしていければよいと思います。四季折々を生かし、食も高級路線で行くべきだと私は考えています。

それには、街の価値を上げる外資系の高級ホテルの誘致も必要だと思います。彼らは世界中に顧客のネットワークを持っており、顧客の方々は、自分が会員になっているホテルチェーンから宿泊先を選びます。つまり、外資系ホテルチェーンのホテルがなければ、海外富裕層の宿泊先の選択肢にも上がらないということです。

皆、修羅のまちがどのようにして住みやすいまちになったかが気になるようです。博多ではなく、北九州市版で「地球の歩き方」が発刊されるのは嬉しいことです。これをきっかけとして北九州市に多くの人に来てくれるようになればと願っています。

5. 飴野 仁子氏（関西大学商学部 教授）

「未来に向けていま問われているのは、北九州市の本当のポテンシャルは何かということ。」



飴野 仁子（あめの ひろこ）

大阪市出身。2004年 西南学院大学商学部専任講師、2005年 助教授を経て、2007年 関西大学商学部准教授、2012年より現職。博士（商学）。専門分野：物流・ロジスティクス政策。国土交通省交通政策審議会港湾分科会委員、大阪地方労働審議会港湾労働部会委員、北九州市地方港湾審議会委員、大阪府吹田市教育委員など。日本物流学会理事、日本港湾経済学会理事。

「5年後、10年後、20年後の北九州市の具体的な未来像はどのようなものでしょうか？」

日本の総人口は、年々減少の傾向にあります。総務省統計局によると、日本人の人口は、直近の2023年に80万人以上減少し、初めて47都道府県の全てで、日本人の人口が減少しました。減少数、減少率ともに調査開始以来の最大値でした。人口が減少するという事は、主に出生数よりも亡くなられた方の人数が上回り、転入よりも転出される方が上回っているということです。今後、効果的な施策が講じられたとしても、すぐには人口減少の傾向は変わらないでしょう。北九州市も例外ではありません。

VUCA（Volatility 変動性、Uncertainty 不確実性、Complexity 複雑性、Ambiguity 曖昧性）の時代と言われますが、そのような時代だからこそ、大事なことを見誤ってはなりません。生まれてきた子どもたちが、このまちで豊かに育まれ成長する5年、10年、20年の時間と環境は、彼らに様々な影響を及ぼすことになるでしょう。どのようなまちであれば、彼ら一人ひとりが、夢と希望を抱くことができるのか。

一方、総人口に占める65歳以上の割合は約30%に上り、年々増加の一途を辿っています。65歳以上の年齢層が、日本人人口の主流にな

るのはもうすぐそこにあります。いつの頃からか、年を重ねるほど、肩身狭く生き辛く感じるような社会になってはいないでしょうか。もしも、長く生きることによって不安感や気まずさを覚えるような社会であるならば、それはいまを生きる子ども・若者たちの未来にとっても、無関係ではないでしょう。北九州市でも、若者たちの流出と人口減が、懸念される課題の一つだと思います。若者たちの流出にどのくらい危機感を覚えていますか。社会環境の変化も踏まえて、いったい何が必要とされているのか、知恵を絞らなければなりません。

「未来を拓くカギは何か？」

未来を拓くカギは、いま、医療・福祉・教育と研究へ、徹底的な投資をおこなうかどうかではないでしょうか。現状の延長線から未来を変えるには、そのぐらいの覚悟と発想の転換が必要でしょう。重要なことは、市民の生活の質を高めることができるかどうかです。

誰かと出会い、共同で世帯をかまえる場合でも、シングルでも、市民がずっと安心して生きていける希望の未来を描けるような“まち”でなければ、企業にとってもポテンシャルを秘めた魅力的な都市とは映らないでしょう。これまで私が出会ってきた学生たちの中には、将来の

職業選択では「稼げる」だけでなく、社会と関わって「自己実現」や「社会貢献」できることに、より充実感を覚える学生が少なからずおります。そのような次代を担う彼らの感覚に、企業も行政も教育研究機関もどこまで気づいているのでしょうか。舵を切るときは来ています。

私も出席している北九州市地方港湾審議会では、委員の約30名の男女比が1:1に近い構成となっています。これは言うは易しですが、なかなかできないことを北九州市は続けておられ、男女共同参画について先駆的な姿勢が伺えます。些細なことに思えるかもしれませんが、大きな転換を模索するとき、案外その転換点は、地道なことの積み重ねの先にあるものだと思います。

視点を変えて考えると、人口100万人以上の大都市や、毎年人口増の都市だけが、ポテンシャルの高い都市と言えるのでしょうか。消費の視点から見ればそうかもしれませんが、地球環境問題をひとつとっても、それだけでは充分とは言えないでしょう。北九州市の規模は、市民と行政の距離を近くとることができ、風通し良く未来に向けていろいろなことを試すことができる、ちょうど良い条件を備えていると思います。その意味ではポテンシャルを有していると思いますが、今後問われるのはその中身です。

「築いてきたインフラを、いま未来のためにどのように使うか」

これまで北九州市は、丁寧なまちづくりに取り組み、特に港湾・空港・道路などの交通インフラはとても充実していると思います。歴史的にも古くから交通の要衝として、九州のみならず、国際的にも存在感を示してこられました。「ものづくり」を支えてきた「物流」に重点を置き、政策も独自性をもっておられます。先般、北九州市の主要産業として物流をさらに発展させるため、「北九州市物流拠点構想」(2022年3月)を策定されました。この構想では、市は

物流拠点としてポテンシャルを高め、「①陸・海・空の結節点周辺エリアを中心に、物流関連施設の集積を図る」、「②各種輸送モードを組み合わせ、多種多様な物流ニーズと時代の変化に対応できる街」、が目指す姿だとあります。

まさにその通りと思いますが、私は、この物流拠点構想の施策を展開する先に一つまり、交通インフラ・物流政策の充実の先に一、いまこそ北九州市の“豊かな未来”が確実に結びつかねばならないと思います。交通インフラの充実は不可欠ですが、市民が“暮らしたいまち”の条件はそれだけでは測れないように思います。遠回りに思えるかもしれませんが、交通インフラと共に、人への投資—医療・福祉・教育と研究への投資—を手厚くさらに磨き上げることこそ、他市にはない強みであり、結局は、この充実した交通インフラをいちばん活かす近道ではないかと思うのです。

「人口減少の時代に、この国の要(かなめ)であるということ」

北九州市で生まれ育った人が、いったん市外に出るのは良いと思います。そのまま出て行ってもいいし、いろいろと吸収して戻ってくる人もいます。戻って出てまた戻って、を繰り返しても良いのです。物流のみならず人流にもバリアのない都市は、しなやかな強さを有し、変化に対応する適応力を備えているということです。市の力をアップデートできるかどうか肝心です。

アップデートできる力を有するならば、他市には比類を見ない優れた特質であり、この国の要(かなめ)の都市である条件にもなり得ます。変化には躊躇もあろうかと思いますが、成功したことも失敗したこともパワーにしつつ、既存の枠組みから自由になって、古今東西の誰もまだ描いたことのない未来像を描いてほしいと思います。人口増とはいかずとも、社会インフラと市民サービスが充実し、“市民が主役であるまち”に、未来がないわけではないではありませんか。

6. 井上 羽菜氏（福岡県立小倉高等学校）

「未来につなぐためには、一人ひとりが地域のことを「自分事」として考えることが必要。」



井上 羽菜（いのうえ はな）

北九州市出身。

これまで、「北九弁」に関するイベントを考案してコンテストに応募したり、ミライ・トーク in 小倉北区にパネリストとして参加したりしてきました。今後は、大学で地域創生の理論と実践力を身に付けるとともに、様々なイベントの運営に積極的に関わりながら地域貢献に携わっていきたいと思います。そして、北九州市の活性化をリードする人材になりたいと思います。

「過去の伝統を未来につなげていく」

小学校の授業で、北九州市には公害克服の歴史の中で培ってきた高い環境技術があると習いました。これは今後も引き継いでいくべきであると思います。

また、小倉祇園太鼓や、わっしょい百万夏祭りなどの文化・伝統も今後も継続できるようにしてもらいたいです。市民が様々な形で参加するように工夫することで、「自分たちの祭り」であるという意識が高まり、演者と観客が市民としての一体感を感じることができるようになると思います。そうすることで多くの人が北九州市に対する愛着を感じるようになり、地域コミュニティが活性化していくのではないのでしょうか。

以前お祭りに参加した際に、ごみを管理するボランティアの方々がありました。そのような「演者」「観客」だけではない、新しい祭りへの関わり方も周知することが必要だと思います。

「豊かな自然も未来に」

自然が豊かであることも今後も引き継いでほしいです。市外の人には工業のまちとして知られていますが、区役所の近くにも自然があるなど、自然が豊かなまちであると思います。また、タケノコといった特産品など、食べものも

おいしいです。自分ひとりで買い物をするのはまだありませんが、地域の食材のポップを見て地元食材を買うこともあります。小学校でも地元食材を使った献立がありました。地産地消には今後も力を入れてほしいです。

「今後を担う人材の育成も必要」

北九州市の今後を考えるにあたって、人材の育成も必要だと思います。地域創生の原動力は、地域のことを「自分事」として考えることです。小中学校の課題解決などの学習活動でそういった考えは醸成されると思います。

「中高生が自分の意見を言う場が必要」

以前、ミライ・トークという、中高生も含めた北九州市の将来について議論するイベントに参加しました。選挙権を持っていない中高生は、なかなか社会に意見を言う機会がありませんが、このイベントでは、あらゆる世代の方がいて、多くの人に自分の思いを聞いてもらえるという非常に貴重な経験ができました。そういった場は非常に大切であり、今後必要であると思います。

パネリストとしての発表だけではなく、市民の方々との意見交換でも自分の視野が広がりました。あらゆる世代の人に自分の意見を発し、また、あらゆる世代の人の意見を聞くというこ

とが重要であると感じました。

「北九州市にずっといたいと思わせるために」

人口減少対策としてU・Iターン施策をやっていますが、市外に出ていく可能性のある中高生に向けた、北九州市にずっといたいと思わせるような取組も必要ではないでしょうか。

中高生が北九州市について考えることに意味があります。SDGs アクションプランコンテストなどのような形で、北九州市についてのアイデアコンテストを行って、北九州市に愛着を持つきっかけをつくる必要があると思います。

「北九州市を楽しんでもらうために」

小倉駅の南口には多くの施設があり、栄えています。北口には人の流れがあまり見当たらず、スタジアムなどの市外から多くの人を訪れる施設もイベントが終わればすぐに帰ってしまう人が多いように思います。アミューズメントを楽しんでもらえるように、北口の施設整備を行った方が良いのではないのでしょうか。

また、北九州市にはいろいろな食べ物や観光地があるので、北九州市の観光パックのようなものを提示するほか、外国語でのキャプションを付けて海外に発信するなど、広報に力を入れると良いのではないのでしょうか。何かに自分からアクセスしないといけない形ではなく、受け身の人にも届くような工夫があれば良いと思います。市外の人に良さをアピールするには広範囲の発信と、情報にアクセスしやすい設計が重要です。デザイン専門の民間企業と連携しても良いのではないのでしょうか。北九州市にはデザインクリエイターが多く居るように思います。

「社会変革に対応できる企業の誘致を」

まちの活性化に向けて、今あるものを活かすのも重要ですが、外からの働きかけも必要です。

デジタル技術関連の企業や、IT企業などの、今後の社会変革や、環境の変化に適應できるような企業を北九州市に誘致してほしいです。

「みんなが快適に過ごせる空間の形成を」

都市整備の観点からいうと、快適で魅力的な都市空間の形成に向けて歩行者の視点に立ったまちなか整備を行ってほしいです。

荷物を持ってまちを歩いていると、歩道が狭く感じる場合があります。高齢者・子連れにとって段差はあまり良くありません。歩行者の視点に立って、歩道の幅や段差の解消が行われれば良いと思います。また、使えるお金が限られている学生向けに、屋外や公共施設内に休憩所があると良いと考えます。

今後少子高齢化が進むことが予想されますが、高齢者がまちなかに行くのが億劫にならないような整備も行う必要があると思います。

「おもしろさあふれるまちにむけて」

令和2年度の市民意識調査では、多くの人が住みやすいまちであると回答しており、子育てしやすい環境ランキングも高くなっています。また、医療・福祉も充実しているので、幅広い世帯にとって暮らしやすいまちであると思います。それを維持しながら、そのうえで「面白い」の要素をプラスすることが必要ではないのでしょうか。

産業面では、環境技術・グローバル企業の商品開発力があると思います。企業の誘致や地元企業の海外へのマーケティング、異業種コラボレーションによる新産業の創出の支援を行っていくと良いと考えます。稼げるまちの実現にもつながるのではないのでしょうか。福岡市と比較しても地元企業の技術力は高いと思います。効率化を目指したコラボレーションだけではなく、「アニメ×商店街」など意外性のあるコラボレーションをしたらもっと面白いことができるのではないのでしょうか。

7. 岩元 美智彦氏（株式会社 JEPLAN 取締役執行役員会長）

「ワクワク、ドキドキの星・北九州！楽しいが正しいのまちに」



岩元 美智彦（いわもと みちひこ）

鹿児島県出身。

北九州市立大学卒業後、繊維専門商社に就職。容器包装リサイクル法の制定を機に、繊維リサイクルに深く携わる。

2007年に現社長の高尾正樹氏と共同で日本環境設計(株)（現・(株)JEPLAN）を創業。2015年アショカフェローに選出。2016年より会長。

「鉄のまちのイメージを生かし次の展開へ」

北九州市は「鉄のまち」のイメージが強く、加えて、化学会社も多いのが実情で、それらを生かし、次に展開していけば良いと考えます。

共通点はやはり「ものづくり」。非常に大事な財産です。日本人にとって「ものづくり」は分かりやすく、好きな人も多いのではないのでしょうか。具体的な製品に落とし込み、さらに「仕組みにする」「基準をつくる」というところが重要で、北九州市にその素地・ベースが十分にあると考えています。

「北九州方式を作り、世界を巻き込んでいく」

当社の北九州工場を改築・拡張する形で仏企業と準商用レベルの設備を稼働しています。この企業は化学プラントのOS（オペレーティングシステム）を握り、プラントプロセスのルールをつくっているような会社です。例えば日本の化学メーカーが工場配管を変更しようとしても、同社の許可が必要であるように、全体のプロセスを支配できるような仕組みを有しています。

しかしながら、日本企業は基準づくりができていないため市場競争では後塵を拝する形となっています。

現在、PETのリサイクル一つをとっても、定

義がない状況です。そもそも「何をリサイクルと呼ぶか」については、ルールづくりの必要があると思います。例えば、使用済の服など繊維由来の当社原料を活用した製品がある一方、服ではなくPETボトルを原料につくる服もあり、後者はヨーロッパの基準ではリサイクルと呼べません。このように欧米で言われていることを守るばかりでなく、「自らが基準をつくる」という視点を持つことが大事です。

ケミカルリサイクルに関する基準を国内でつくることができれば、各企業がその範疇でのづくりをするようになるので、より効率的になる部分が出てきます。ぜひ「北九州方式」の「基準」「定義」を国や国際機関、メーカーを巻き込んでつくり、発信することができればと思います。世界標準として、また、稼ぐこともできるということが全世界に広がっていくと良いですね。

「理念・技術・実績をもとにルールづくりを」

世界におけるルールづくりのためには、資源の完全循環の国内完結を実現する必要があります。それには、「理念」「技術」「実績」のどれもが重要で、目に見える実績があれば、海外においてもルール化に関する発言に重みが出てきます。加えて、世界のパートナーと基準を

つくっていく視点も不可欠です。

また、化学業界では、技術が安定するまで30～40年といった時間も研究費も人手もかかります。そのため、当社としても、本拠地を作り、周りの企業を巻き込みながら、早く実現する方法やコストを抑える方法を研究していきたいと考えています。

「リサイクルの仕組みづくりを市民の文化に」

ルールができれば、廃プラスチックがより資源として扱われることとなり、まちからごみが無くなるのではないのでしょうか。このように一部の技術としてのみならず、文化や社会システムを変えていくことへとつながっていくと考えています。これには「回収ボックスがある」など身近であることが大事であり、眼鏡、家電、おもちゃなどの回収を通じて、みんなで参加し、自分事としての行動変容の積み重ねが文化につながるのです。

併せて、廃棄物から作業服や学生服など身近なものを作るなど、具体的な行動をうまくつなぎ合わせれば、まちとしてもイメージしやすくなります。「いいな」「具体的だな」「腹落ちしたな」ということが大事です。

例えば当社が過去に携わった事例としておもちゃのリサイクルが挙げられます。日本で実績をつくり、海外本社も注目するに至りました。日本の動きが世界とつながっているということのグッドプラクティスであり、是非知ってほしいですね。

このように、リサイクルについては、世界のパートナーと一緒に仕組みをつくり発表するという段階にきています。今後も積極的にコラボしていけば良いのではないのでしょうか。国内競争ではなく、自治体も国もコラボし、一緒になって世界と戦わないといけません。

北九州市は循環型社会をつくるポテンシャルがあると感じています。今後、効率よく1対1のリサイクルができれば、外から資源を買っ

てくる必要がなくなり、ひいては世界における資源の奪い合いもなくなるのではないのでしょうか。ぜひ、全世界が望む地球環境と世界平和のためにも資源循環のルールづくりをすべきだと考えます。

「投資家を巻き込み、「星」を作る」

リサイクルの技術やルールづくりには、資金も必要となります。そのため、世界の投資家と対等に話せるような知識と経験が必要となってくると思います。例えば、テスラを育てたファンドは「星をつくった」と評されています。「星」ができれば、そこに重力が生まれます。当社も世界に向けて「持続可能な惑星をつくろう」という思いを発信するために、社名をJEPLANに変えたのはまさにそれが理由です。

「ワクワク、ドキドキの星（市、まち）へ」

ワクワクやドキドキがあるからヒト・モノ・カネが集まります。「デロリアンをリサイクルで走らせる」ことは、憧れや夢がありますよね。

「楽しい」が「正しい」の典型の事例だと思います。技術開発、仕組みづくり、ブランディングの一連の取組を通じて、着実に良い社会になって行っていると感じました。次は世界CO2が少なく、象徴になる製品をつくりたいですね。

このように当社が展開している北九州市での事業においては、市役所のサポートもあり、様々な許認可を含めてワンストップで実施できています。ぜひ北九州市には「ワクワク・ドキドキの星」を目指してほしいと思います。

8 & 9. 上野 伶華氏、中村 翔氏 (北九州市立高校)

「雰囲気良く、思いやりのある人が多いまち。良い文化は残して欲しい。」



2年 上野 伶華 (うえの れいか)

北九州市出身。家族や友人、このまちを愛する気持ちが人一倍強い。幼少の頃から憧れる看護師を目指して勉学に励む。充実した高校生活を送っている。

2年 中村 翔 (なかむら かける)

北九州市出身。将来の夢であるシステムエンジニアを目指して勉強中。そしていつかこの町で働いて暮らしていきたいと考えている。

「思いやりのある人が多い」

住んでいる地域は、おじいちゃんおばあちゃんが自分に対してわが子のように接してくれ「学校どうだった？」というようなことを聞いてくれる良い雰囲気があります。友達も優しく、思いやりがある友達が多いです。他人を思いやりたり他人を優先したりといった人が多いというのは、世代を問わず感じることです。

「さらに明るい雰囲気を伝えられるように」

地域の人の温かい雰囲気は良いのですが、街灯が少ないエリアは、夜すごく怖いと感じます。住んでいる地域でも、夜いきなり陰から「おかえり！」と言われ驚いてこけてしまったことがあります。街を物理的に明るくすることで雰囲気もさらに明るくなるのではないのでしょうか。魚町の商店街は明るいですが、少し離れると暗くて治安が悪いというイメージがあります。薄暗いというのは人間の心理的にも良くないイメージを抱くと思います。北九州市は治安が悪いイメージを抱かれがちですが、「そんなことないよ」と思ってもらえる取組があれば、経済的にも良い方向に行くのではないのでしょうか。

「ごみのない綺麗なまち」

北九州市では、食品ロス削減の取組である「残しま宣言」を道徳の授業でやっています。

北九州市は綺麗でゴミがないし、ゴミ箱も多いと感じます。ESS (部活動) で海外の人の意見を聞く機会もありますが、彼らからも北九州市はゴミが少ないという意見を良く聞きます。以前見かけて驚いた光景として、ゴミをポイ捨てしている人がいたのですが、そのそばから拾っている人がいたというのがあります。ゴミ拾いはボランティアの方がたくさんいて、とても大切なことだと感じています。

「外国人にも、まちの魅力が伝わる工夫を」

以前、外国人の方に両替する場所を聞かれた際に場所が分からず困ったことがありました。駅は色々な人が集まるので、アジア系も含めた言語のデジタルサイネージを吊るすなど、良く来訪する国の方向けの設備を設けた方が良いのではないのでしょうか。

外国人の方は、食べ物や商業が集まっているのは小倉というイメージがあるようです。多言語対応の小倉のパンフレットを作り、こんなことができる、こんなものが食べられるということが伝えられれば良いのではないのでしょうか。

「福岡市といえば」といえる名所は屋台がありますが、北九州市はそのようなもののイメージが薄いと感じます。周遊コースの設定や“〇〇めぐり”のように、観光名所を分かりやすくすることで来訪する人が増えると思います。

「受け継ぐことが文化をつくる」

昔あったお店がどんどん潰れていったり、シャッター通りと言われるようになっていたり、コンビニやフランチャイズ展開されている店がたくさんできています。新しいものを取り入れるのは大事ですが、昔ながらの良いお店も残っていけるようにしてほしいです。受け継ぐことが文化をつくっていくと考えています。且過市場も残ってほしいです。伝統は、人と人のつながりから生まれていくものだと感じています。

～中村さんのエピソード～

ずっと通っていた本屋が、跡継ぎがないためにつぶれてしまったという経験があります。電子書籍の普及によって本を買わない人が増えましたが、私は昔ながらの古本屋の香りが好きです。学校から帰ってサッカークラブに行くまでの間にその本屋に少し寄って、店長のおじいちゃんと話す、という習慣がありその方の人柄が優しくて気に入っていました。このような良いお店が残っていくためにできることはないかと考えたときに、学校のクラブ活動として運営の手伝いをしても良いのではないかと思いました。当校でいうインターアクトクラブや図書部活動の一環として既に行っている読み聞かせのボランティアに加え、若い人にまちの良い本屋を知ってもらうためにも良い仕組みではないかと思います。

～上野さんのエピソード～

私はもともと小倉南区に住んでいました。久しぶりにかつて住んでいた地域を訪問した際に感じたこととして、「この公園はまだあるんだ」などと当時の景色を嬉しく思う一方で、マンションが建って景色が変わってしまったところもありました。公園のような、みんなの憩いの場は残って欲しいなと思います。おじいちゃんおばあちゃんがお話ししていたりする場が好きであり、そのような場所ができるだけ残

っていて欲しい。他にも“友達と遊んだ”、とか“ここで〇〇ができるようになった”、という場所は残ってほしいです。まちはちょっとずつ変わっていくものかもしれませんが、そのような場所が残っていれば、もしも自分に子どもができたときには連れて行きたいと思っています。

「手間や危険を排除するのは良いことか」

デジタル化の進展で、手間がかからないこととは良いことであるという風潮がありますが、必ずしもそうではないのではと思うこともあります。例えば、ロボットの犬と比べて本当の犬は手間がかかって大変なこともあります。生きた感情があるように、手間がかかることでしか得られないものがあります。その反面、生きものには死があります。別れは何度繰り返しても慣れず、悲しいことだけれど、生きていく中で大事なことだと思っています。

公園の遊具も危ない、管理が大変という理由で撤去されています。安全や最近の風潮を重視しすぎて、楽しくない社会になっていっているのでは？と思うこともあります。

「古き良きものをつないでいく」

授業の中で北九州市ふるさとかるたをやるがありますが、そのような取組も大切だと思います。

新しいことも取り入れつつ昔のこともつないでいく、良い雰囲気を大切にできるまちならば住み続けたいと思います。まちの中の一つ一つの店が輝けるようにしてほしいです。